

河合塾・大竹先生による

先生方のための徹底入試対策講座

第36回 過去問の研究は

「過去問をいつからやればいいのですか？」

「個人差もあるし、いつからやらなければならないというようなことでもないし...」

「先生、隠さないで、いつからやるのがいいのか教えてください。」

「.....」



最近、「指示待ち」という言葉をよく耳にします。若い人の、積極的に自分でやるべき仕事を見つけようとせず、誰かからの指示で動く、という状況のことかと理解しています。今の生徒をみていて思うのですが、指示待ちというより、指示より前に聞いてくる、という生徒も少なくありません。

1 生徒にとっての過去問

そろそろ、生徒諸君は時期的には過去問をやり始めようかというころでしょうか。過去問の出題傾向について生徒から聞かれることもしばしばですが、過去問について分析して生徒に伝えることは、あまり気かけなくていいかな、と思います。たとえば、同じ問題でも、分析者が計算が得意なら計算は大したことないと言うでしょうし、計算が不得意なら計算量が多いというかもしれません。赤本や、予備校の分析は、まあ話半分で捉えておくのがいいのでしょうかね。生徒に対しても、

その生徒により、「出題傾向」は異なる

と思います。

受験生には過去問2年分でもやらせてみてはいかがでしょう。多分実感すると思います。とんでもなく難しい、とか、時間が間に合わないとか、ときには、楽勝！？とか、いろいろ自身で感じてもらうのが一番ですね。

多くの場合、まだ受験勉強ができていないと、あまりできません。でもそれでいい、その

できない分野、苦手とするテーマ、そのようなものが
少しでも分かれば、それからが受験勉強のスタート

ですね。

したがって、過去問研究は傾向を知っても十分な対策をとる時間的な余裕がある時期でなければ意味がありません。直前期にやって、余りできない...では遅すぎるのです。

単なる傾向を知ることだけではなく、

過去問は学力を伸ばす素材

としなければなりませんね。

2 先生にとっての過去問

教員であっても、過去問はそう簡単に解けるものばかりとは限りません。河合塾の入試解答速報のとき、こんな時間内で解くことが要求される受験生は大変だなあ.. と思うこともしばしばです。

ある大学の過去問について生徒に聞かれた時は、自分なりの感じを話しますが、自分で実感しないとホントのところはわからないよということも伝えます。

教員にとって過去問研究は、じっくりと解いてみて（解けなければまたその問題を勉強して）観賞するような態度でいいのではないのでしょうか。

「あの大学の問題は難しいけど、実にうまく工夫してるな」

とか

「いやあこの問題はきれいな問題だな」

とか、その印象の積み重ねが、傾向を把握していくということかなと思います。

数学も音楽も絵画も、観賞しまた鑑賞する、つまり、

楽しみ味わうことが理解することにつながる

ように思います。

いかがなものでしょうか。